

PrisonBreakers Plan-1

163



Plan-1 脱獄先は限界集落

カチャリ。

何者をも逃さんとする牢の扉が静かに開く。

「……大丈夫そうだな。」

一人の大柄な男性が扉の合間から顔を覗かせて確認をする。

「当たり前でしょ？看守は予定だとここには一時間は見回りには来ないんだから。」

はあと傲慢そうに腕を組んだ男性が溜め息を吐く。

「ふふ…そんなかりかりしないの、日田君。」

腕を組んだ偉そうな男性、日田夏^{にったなつ}を長髪を後ろで一つに結んだ男性が肩に手を置いておちよくる

。

「水蓮^{すいれん}…いい加減に」

夏は馬鹿にしてきた水蓮清史^{すいれんきよし}を拳で殴ろうと振りかぶる。

「お前ら、脱獄に集中しろ。」

牢獄の鍵を開けた大柄で真面目そうな男性、土居助久^{どい たすく}が夏の手首を掴む。

「土居さん、助かったよ。」

清史はまるで反省していない。

「…ふん。」

夏はそっぽを向いてしまう。

「…それと、月城^{つきしろ}はそろそろ起きろ。」

部屋の隅で横になっている、鉄格子内の四人目の住人、月城刀夜^{つきしろとうや}に声をかける。

「…おはよ、ここから出るんだよね？」

むくりと起きて、ふぁあと眠そうに目を擦る。

「そうだよ。…これから世紀の脱獄ショウの始まりだからね。」

清史の声は至極楽しげに弾んでいる。これから起こる出来事に胸躍る。

「まずは他の部屋の鍵から開けていく…いいな。」

助久は冷静に告げ、四人は鉄格子の外に踏み出して行く。

これが後に日本最悪と言われる府低刑務所脱獄事件^{ふてい}の始まりだった。

「はぁ...やっとなんて。さっさと出てよね。」

夏は牢屋の扉を開け放つ。

「お疲れサマデス、ナツ！」

二一〇号の金髪で青い瞳の囚人、エルヴィーノ・ミロ・ブツエツラがいきなり抱きついてくる。

「うわっ、そういうのやめてって言ってるでしょ！」

夏はエルヴィーノの鳩尾に一発拳をお見舞いする。

「痛いデース...。」

パンチが綺麗に決まりにエルヴィーノは蹲る。

「エル、日田さんはそういうの嫌がるから止めろって言ってるだろ...。」

溜め息混じりに二一〇号の二人目の住人、^{ほしかひかる}星科煜が奥から出てくる。

「デスガ、ワタシはナツと仲良くなりたいデス！どうしたらいいデスカ...ヒカル？」

「...だからまずは、過剰なスキンシップを止めたらいんじゃないか？」

煜は半ば呆れて返事をする。

「Oh...。そんなムチャな...。」

「...ちょっと、無駄話しないでささっとしてくれない！」

エルヴィーノと煜の呑気な会話に堪忍袋が切れた夏は、ガンツと壁を蹴る。

「後、^{ありみね}有峰は？」

夏は、薄暗い闇の中に呼びかける。

「...相変わらずせっかちだな。今、出来たところだ。」

奥から、よいしょとダンボール箱を抱えた男性、^{ありみねそうじ}有峰創蒔が出てきた。

「悪いが...^{あいざ}相座、もう一箱持ってきてくれないか。」

「わかりました、有峰さん。」

二一〇号最後の囚人、^{あいざかける}相座駆が創蒔と同じ箱を抱えてきた。

「バクダン、この部屋のもんで作りマシタ！ナツ、どうデスカ？」

エルヴィーノはダンボール箱を開けて、夏にきらきらした視線を投げかける。

「ふーん...さすがってところかな。」

箱の中には黒くて小さな球体が沢山詰まっていた。

「でショでショ！」

エルヴィーノはふふんと得意げに腰に手を当て仰け反る。

「エルは偉そうにする程大した事やってないだろ？」

煜はエルヴィーノをペシッと軽く叩く。

「ほぼ全部有峰さんと星科君で作ってました。...全然役に立てませんでした。ごめんなさい、ごめんなさい。」

駆はぺこぺこと頭を下げる。

「まあまあ、駆さんがエルを止めてくれたから、なんとか全部作り終えたんだから、そんな謝らないで。」

焔はあわあわと駆をフォローする。

一方で、二一〇号の何処と無くアットホームな会話から又も除け者にされた来客は怒り心頭だ。

「...ちょっとお、いい加減なさいよ！早くしないと、計画に支障が出るでしょうが！！」

夏は怒鳴りつける。

「ナツ、除け者にしてごめんナサイ...。さあ、一緒に」

「少し黙っててくれ。エルが話すとややこしくなる。」

嫌な予感がして即座に焔はエルヴィーノの口を塞ぐ。

「ふん、まあいいけど...。星科は俺と管制室でそっちの三人は一階で土居達と合流ね。」

「ヒカル、暫しの別れデスネ。潜伏先で無事に会える事を祈ってマス！...では行きますヨ、カケル！」

エルは颯爽と駆け出し、二一〇号を後にする。

「わわっ、待って下さーい！」

駆もエルを追いかけて、姿を消す。

「...おい！箱一つでいいから持ってけよ！」

お手製爆弾の詰まったダンボール箱を抱えた創蒔の叫びは虚しくもエルヴィーノと駆には届かなかった。

「ちょっと、お前らさあ！せっかく立てた計画が狂ったじゃん！どうしてくれるわけ！！」

夏が二度目の怒声をあげた時だった。

ピンポンパンポンと放送が流れる音が響く。

『あー、あー、日田君、聞こえてるー？』

清史の声がスピーカー越しに聞こえる、

『俺たち、管制室の制圧とっくに終わったんだけど？...そう言えば、計画通りにしろだの、狂わせるんじゃない、とか散々言ってたのって何処の誰だったかな？』

ふふふと楽しげな笑い声も夏の怒りをさらに掻き立てた。

『...ふあ.....ねむ。』

遠くの方から刀夜の気怠げな様子も伝わってくる。

『おっと、ここ出るまでは寝るの我慢だからね。...っと、放送切るの忘れてた。兎に角、日田君早くこっち来てよ、じゃあね。』

プツンと放送の切れる音がした。

「いい度胸してんじゃん、水蓮ぶっ殺す！」

「そうだ、刀夜の事忘れてた！俺何やってんだよ！」

怒髪天の夏と慌てる焔は管制室に向かって二一〇号を飛び出して行ってしまった。

「おい！箱一つでいいからってさっきも言ったな...。...仕方ない、二つ持ってくしかないか。」

完全に置いてけぼりをくった創蒔は爆弾の箱を二つ重ねて一階へと向かって行った。

バンと勢いよく扉が開かれる。

「何処だ、水...って、ちょっと血生臭いんだけど！」

管制室に入るとツンとした刺激と鉄の匂いが鼻腔を直撃する。

室内を見回すと看守と思われる人間だったものが無造作に置かれている。

流れ出た血と青白い肉と部屋の白が奇妙な三重奏を奏でている。

「えー...そんなに臭う？」

奥から府低刑務所の囚人達共通で来ている薄暗い緑の作業着が所々赤く染まった清史が出てくる。

「当たり前でしょ！こんな適当に死体転がってたらそうなるつつうの！...これだから殺し慣れてる奴らは...ったく。」

はあと怒る気力すらなくなり夏は溜め息を吐く。

「ああ...またこんなに派手にやっちゃって...。これ処理すんの結構大変なんだからな...。ってそんな場合じゃない！刀夜は何処にいるんですか！」

煜は慌てて刀夜を捜す。

「...呼んだ？」

刀夜が気怠げに奥から出てくる。

やはり、作業着は血だらけだ。

「また、こんなに殺して...。ああ、もう顔に血がついてる。」

煜は刀夜の頬に付く返り血を自分の袖口でごしごしと拭う。

「...煜、ありがと。」

「次からは自分の顔位拭けよ。」

「ちょっと、こんな派手に汚して機器は大丈夫なわけ？」

夏は部屋のあちこちに飛び散る血と転がる死体を見て心配する。

「それなら心配しないで。その為にここら辺で殺したんだから。あっちは綺麗だよ？」

清史は指を指し得意げな表情を浮かべる。

「...まあ、そうみたい。まあ、いいや。さっさと終わらせなきゃ。」

夏はスタスタと歩いて画面が何面も連なり、巨大なタッチパネルがついた機器を操作しだす。

一瞬の迷いもなく動く夏の真剣な表情と身体の動きは美しく、視線を外すことが出来ない。

「...すごい。」

気怠げで今にも瞼が閉じそうだった刀夜が目を覚ました。

「やっぱ、七欲^{しちよく}の一人なんだな。」

煜は感心する。

十数分前に怒鳴り散らしてた様子から打って変わっていた。

夏を含めて府低刑務所の中でも特に刑の重い七人の囚人の事を他の囚人達や看守達がいつの頃からか人間の七つの欲に当てはめて七欲と呼ぶようになった。

「流石だね。...そして、後ろが無防備だ。今なら、日田君を味わえそう...。」

清史は夏の腰から尻にかけて欲望の眼差しを向け舌舐めずりをする。

「...ふう。こんなもんかな。.....ちょっと変な目で見ろな、この性欲の塊！！」

機器の操作を終えた夏は満足げに頷いたのも束の間、清史の視線に不快感を感じ怒鳴る。

「お疲れ様。いいじゃん、いい加減やらせて欲しいなあ。それとも...童貞なのが恥ずかしいのかな、権力欲の日田君？」

清史は至極楽しそうに夏の怒りを更に煽る。

七欲の呼称には刑の重さ以外のもう一つの理由がある。

七欲の七人の犯行動機が、それぞれが純粋な人間の欲に因るところに起因している。

夏は、人の上に立ちたい、支配したいという権力欲が理由で罪を犯した。

清史も七欲の一人で、性的欲求により罪を犯して府低刑務所にいる。

「ちょっと、二人共。そんな事しないで早く此处でましようよ！」

清史の煽りに見事に乗っかる夏を見兼ねて煜は慌てる。

「まあ、それもそうだね。日田君、行こうか。」

「...ちっ、後で絶対殺すから。」

清史と夏は刑務所の出口に向かって走り出す。

煜も後に続こうと思ったが、何かを忘れているようで一通り部屋を見渡す。

「...ねむ」

いつの間にか隅の方の壁に寄りかかって刀夜は瞼を瞑りそうになっていた。

「刀夜、頼むから此处で寝ないでくれ、出るまでの我慢だから、な？」

刑務所に置いてけぼりなんて御免だ。

煜はなんとか刀夜の眠りを妨げる。

「うう...わかった。」

渋々といった表情で体を起こし、煜と共に刀夜は外を目指して管制室を後にした。

ガラガラガラと音を立てながら、府低刑務所と街を隔てる扉が開く。

「日田の奴がやってくれたみたいだな。」

正門前に待機していた助久は腕を組んで開門の様子を眺める。

「...すいません。.....遅くなりました。」

箱二つを抱えた創蒔が息を切らして歩いて来た。

「いや、そこまで遅くは.....何故一人で二つの箱を抱えているんだ、有峰？」

誰かと一緒に行動がこの脱獄計画の基本だ。

丸腰の囚人達に対し看守には武術の心得と拘束具と通信手段がある為、一対一では何かと不利なのだ。

「置いてかれたんでしょうがなくっす。」

よいしょと助久の隣に箱を置いた時だった。

「お前ら、何故外に出ている！！」

かっちりとした警官のような制服を着用した看守が銃を構えて助久と創蒔を睨みつける。

「ちっ、一人取り逃がしてたか。」

看守の背後から一人の男性が刑務所の建物から出てくる。

自然で滑らかに気付かれないように看守に近づく。

ブスリと鈍い音がして看守が力無く崩れ落ちた。

背中にはナイフが突き刺さり、抜くと血が溢れて辺りを赤に染めた。

「...悪いな。^{こんの}金野。」

建物から大柄な作業着の男性、^{あさまりゅういち}浅間龍一 が出てくる。

「ゼン、ありがとうデス！」

続け様にエルヴィーノが手を振ってやって来る。

「待って、下さい...。」

遅れること数秒、駆が息を切らせてやって来た。

「はは、みんな速いね。」

この場所には不釣り合いな雰囲気の上品な男性、^{はくていするが}白帝駿河 がのんびりと歩いて来た。

「ちっ...。お前ら...いや、特にそこの二人の所為でこいつを取り逃がしたんだから...後で、この労働分はきっちり金貰うからな。」

^{こんのぜん}金野善 は不機嫌に血がこびり付いて赤くなったナイフの先をエルヴィーノと駿河に向ける。

「君には助かったよ。僕としても報酬を与えたいと思っているけど...なにぶん今は一文無し同然だからね。後でも構わないかい？」

駿河はナイフに動じずいつものペースで話す。

「ゼン！ワタシ達仲間でショウ、酷いデス！」

エルヴィーノはオーバーな身振り手振りで善に迫る。

「まあ...確かに、彼奴らと違ってな。」

龍一が建物からゾロゾロと出てくる同じ作業着をきた人間達に目線に向ける。

この脱獄計画には府低刑務所の囚人全てが協力して実行していた訳ではない。

脱獄計画を立てたのは七欲や一部の囚人達だけだ。

「へえ...お前ら爆弾なんて用意してたのか？」

「俺らにもくれんだろ？」

中には脱獄に反対の者や茶化してちょっかいをかける者も大勢いた。

助久と創蒔の目の前にいる囚人達もそのようだ。

「お前らにやるものはない。」

助久はきっぱりと言い放ち、睨みつける。

「へえ...なら力づくで奪うまでだ。」

ずっと一人の囚人が拳銃を助久に向ける。

だが、助久は目の色一つ変えない。

「仕方がないな。」

はあと溜め息をつき、作業着のポケットから手のひらサイズの容器を取り出して中身の液体を囚人の顔面にばしゃりとかける。

「...っ、痺れる、なん...なんだ。」

囚人は拳銃を取り落とし、顔を抑えその場に蹲る。

「テメェ何しやがった！」

もう一人の囚人が助久に殴りかかろうとする。

しかし、殴る前にばたりと倒れ込んでしまった。

「金野、手間かけさせたな。」

善が手刀で囚人の首を背後から気絶させたのだ。

「別に。俺は何もしてないのに対価をぶん取ろうしてた此奴らに腹が立っただけだ。」

げしっと足元の囚人を蹴った。

「...詐欺と何が違うんすか？」

善が犯した罪は詐欺だった。

創蒔には転がってる囚人達と善のした事の違いがいまいちわからない。

「此奴らは横取りだ、今までなんもしてない。だが、俺は違う。金の為に人を騙す努力した結果、本人達から貰って金を手にした。...こんなのと一緒にするなよ。」

善はとうとうと自論を展開する。

「...わかり、ました。」

創蒔は、何と無くわかったようなわからないようなもやもやした気分だ。

だが、あれこれ言うのは面倒を起こすことはわかっていたので頷いておく。

その時だった、キキィと府低刑務所正門の外に一台の黒塗りのワゴン車が止まった。

中から黒いスーツに柄もののワイシャツを着た男性が出てくる。

只者ではない鋭い雰囲気から察するに裏社会に生きる人間であるのは明確た。

「若、ご無事ですか！」

男性は龍一の姿を見た途端に先程までの雰囲気が変わり泣き笑いの表情になる。

「ああ、心配かけたな。...早速だがこいつらを運んでくれ。」

龍一も雰囲気が柔らかくなる。

だが、まだ脱獄の途中だ。

油断大敵だと気を引き締めて、指示を飛ばす。

「了解しました。...さっさと乗りな。」

「有峰、やらなきゃならないことがある。手伝ってくれるな？」

「うっす。」

助久と創蒔が黒ワゴン車に乗り込む。

「僕らもここにては邪魔なようだし、行こうか。」

「そうですね。...エルさんも行きますよ。」

「ヒカルを待ちたかったのデスが...仕方ないデスね。」

駿河と駆、エルヴィーノも黒ワゴン車に乗り込む。

「ははっ、エルは仲間思いだね。」

「ジャッポーネでは同じ食事をしたら仲間デスヨネ？だから、心配するのは当然デス！」

「それって、同じ釜の飯を食うって事？」

「そう！それデス！カケル天才デス！」

車内に和やかな会話が流れる。

「こんな状態だ、安全運転できないからあんま喋ってっと舌嚙むぞ。」

龍一の部下と思われる男性がエンジンをかける。

「Oh...失礼シマシタ。どうぞ出発してくだサイ。」

黒ワゴン車は、ブォーンとエンジンを響かせ、静かな住宅街の闇に溶け込み、姿をくらませた。

「行ったか...。俺たちは、最後まで此処で全員の脱獄の確認とこれの番をする。」

龍一は爆弾の詰まった箱の隣に仁王立ちをする。

「余ったら、全部俺のものでいいんだな？」

善が残ったのは、対価として余った爆弾をもらえるからだ。

小型で火力が高い為、売ったらいい値段で取引出来ると踏んでいた。

「ああ、そういう約束だからな。...次の奴らが来たようだな。」

自分達の仲間だけでなく、次々に府低刑務所から囚人達が外へと出て来ていた。

囚人達の脱獄ラッシュが落ちていて正門前は閑散としていた。

「火^{ひの}野^{とす}、戸^{おだか}壽^{ふわ}、尾高、不破も通り過ぎた。」

「後は...彼奴らだけか。めんどくさい奴らと一緒にかよ...。」

善はちっと舌打ちを打つ。

程なくして、建物から走ってくる四つの人影が見えた。

「ねえ...日田君、それで限界？」

清史が先頭を走る。

「...うっさい、はあ...はあ、そなんじゃ...けほっ、けほ。」

夏は肩で息をしている。

「大丈夫ですか？きついなら少し休憩...」

煜は夏を気遣い並走していた。

「馬鹿に...しないで！...まだ、はあ、いける。」

煜に気を使われてプライドの高い夏の癪に触ったようだ。

「...体力なさ」

「刀夜、それ以上は言っちゃ駄目だ！」

一歩背後を走っていた刀夜がポツリと漏らすのを煜は慌てて遮る。

「お前らで最後だ。車を待たせてる、早く乗れ。」

龍一がさっさとしろと言った時だった。

ウーウーと遠くからサイレンが聞こえて来た。

段々と音が大きくなり、数も増える。

「ちっ、サツが来たぞ。早くしろ！」

善が段ボール箱を抱えて外で待ってるワゴン車に駆け込む。

「日田君、まだ大丈夫でしょ？」

清史が右手を差し出す。

「あたり前でしょ！俺は...他の雑魚とは一線を画す、府低刑務所の七欲なんだから！」

夏は差し出された右手を握る。

「星科君は左手で月城君は背中押して。さあ、行こうか？」

清史が引っ張るのを合図に、夏は全速力で走り、煜と刀夜もサポートしてワゴン車を目指す。

「急げ！もうそこまで来てる！」

龍一がドアを開けて待っている。

四人は全力で車内に近づこうと足を動かす。

清史が車内に入り、夏を引っ張る。

「日田君、後もう少しだから足を上げて。」

「上げて...るっての...。」

ぜいぜいと苦しそうな呼吸音が周りにも聞こえる。

もう、夏の体力は限界に来ていた。

足すら上げられない状態だ。

「.....ごめんなさい、日田さん！」

焔は思いっきり夏に体当たりをしてワゴン車に押し込む。

「っ！ちょっと...何、すんの...。」

夏は焔の下敷きになってしまった。

「お前も早く乗れ。」

「...うわ。」

「うぐっ、刀夜...重い。」

「ちょっ.....。」

夏を下敷きにした焔の上にさらに刀夜がやって来た。

龍一は刀夜を放り込み扉を閉めて、自分は一つ前の扉から車内に乗り込んだ。

「背後を巻けるか？」

龍一は運転席に話しかける。

「もちろんです、若！」

エンジンがかかって車内は微弱に揺れる。

次の瞬間、ぐわっと背後の背凭れに引っ張られる。

「うわ〜、速いね。...でも、パトカーはついて来てる...か。」

清史はちらっと窓から背後を見つめる。

「.....ふふ、いいこと思いついちゃった。」

手を伸ばして前の列に座っている善の隣にある段ボール箱の中身からそっと爆弾を取る。

「お前、俺が気がつかないとでも思ったか。」

善は清史の盗みに気がつくと思わず物凄い剣幕で睨み付ける。

「まあまあ、面白いこと起こるから見ててよ。」

善のことなどお構いなし、清史は窓を開けて爆弾の頭部にあるピンを抜いて背後の追っ手に向かって投げた。

「It's a showtime♡」

一秒後、投げた先から激しい地鳴りと共に火柱が上がった。

「...なかなかの威力だな。ちっ、動画でも撮っときゃ良かった。いい交渉材料になったはずだ。」

爆発の後にはサイレンの音が聞こえなくなった代わりに周囲の建物が燃えるゴオオという音が耳に入ってくる。

「...追ってこくなかったか。」

龍一も窓の外を眺める。

「ふふ、俺のおかげで...ね。」

清史は得意げな表情で微笑んだ。

こうして、脱獄者達を乗せたワゴン車は静まりかえった夜の街に溶けていった。

「...痛っ...なんなの？」

プスリと体内に入ってきた異物の痛みを感じて夏の眼が覚める。

右腕を見ると注射針が刺さっていた。

しかし、直ぐに引き抜かれ絆創膏を貼られた。

「これで全員終わったな。...有峰、次行くぞ。」

助久が注射器を片して立ち上がる。

「うす。」

創蔭がトランクを持って助久の後に続く。

「ここから近いのは？」

助久は龍一に問う。

「^{きどころ}木所 達の所だな。」

「わかった...行くか。」

すたすたと歩いて三人はドアを開けて出て行ってしまった。

「...なんなの、ここは？てか、何したの？」

夏には全く理解出来ない。

「ああ～...日田君、気絶してたからわかんないよね？」

清史がひょっこりと顔を出す。

「車乗った後、上手く警察撒いて一時的な隠れ家である此処に来て、土居さん特製のDNA配列を変えちゃう薬を投与されたところだよ。...それよりも、どうかな？似合ってる？」

清史はくるりと回って手を広げる。

作業着ではなく、ジーンズにVネックの白シャツの上に灰色のカーディガンを羽織っていた。

「...ふーん、まあまあじゃない。」

「相変わらずつれないなあ～。でも、似合っていないって言わないのなら上々かな。」

清史は楽しそうに微笑む。

「日田、目覚めたならさっさと着替えろ。二時間後には出発だからな。」

善が別の部屋から出てくる。

もう既に着替えているようで、黒いジャケットに深緑のニット、黒いパンツというスタイルだった。

「わかってる。さっさとやればいいんでしょ？...そういえばさ、これから何処に行くわけ？」

今の場所は龍一が部下に用意させた一時的な潜伏先だ。

いつまでも此処にいるわけにはいかない。

だが、最終的な潜伏先が脱獄計画実施一週間前まで良い場所がなく決まらなかった。

決まった今の今まで、探すのに携わった人間以外は知らなかった。

「ああ、その事か。 ^{かみなが}神永 ^{たかせ}村の高瀬って人のところだってよ。」

善は部屋中央にあるソファにどかりと座る。

「...何処にあるわけ？てゆうか...村？」

夏は知らない地名に困惑する。

「ええっと...確か、長野県って言ってたかな？ そうだよな、金野君？」

清史は顎に指を当てて考え込む。

「そう言ってたな。車にカーナビについてるからそれに従えばいいってあんま説明してなかったんだよ。」

善は、はあと溜め息を吐く。

「刀夜、髪乾かさないと風邪引くぞ！」

部屋の奥から焔の声が聞こえてきたかと思うと髪から水滴を垂らした刀夜が出てきて、善の隣に座った。

「...うう、面倒い。」

ふあと欠伸をして背凭れにもたれる。

背後から焔が追い掛けて来て、バスタオルをばさっと刀夜の頭にかける。

「ああ、もう世話が焼けるなあ...。」

焔ははあと溜め息を吐きながらもガシガシと髪を拭いていく。

「月城君達も出て来たし、質問ばっかしてないないで...早くお風呂に入って来たら？」

清史は夏の勘に触るような言い方をして揶揄う。

「はあ...？ 俺に指図するな！ もういい、今この場で殺してやる！！」

清史の顔面めがけて夏は拳を振りかざす。

「お前ら、此处で騒ぎを起こすじゃねえよ。少なくとも彼奴に復讐するまでは捕まる訳にはいかないだからな。」

善がギロリと双方を睨みつける。

脱獄を計画した囚人達には共通した目的がある。

それはある一人の男への復讐であった。

「...わかってるよ？ 金野君はお堅いなあ〜。」

清史はやれやれと肩をすくめる。

「ふん...ムカつく。...わかった、さっさと入ってくればいいんでしょ。」

夏はそっぽを向いて奥へと歩いて行った。

それから、五人が支度を終え神永村に向かう頃には朝日が昇り始めていた。

「やっと...この日が来ました。」

黒縁眼鏡をかけた男性が嬉しそうに四月一日に赤丸が付いたカレンダーを眺める。

「これで村も家も守れます。...とっ、そろそろ迎えに行った方がいいですね。」

期待に胸を膨らませてばたばたと賑やかになる予定の居間を出て行った。

彼はこれからどんな事が起こるかも知らずに。

「そろそろ神永村とかいうのに到着するのに本当にこんなとこであってわけ？」

東京から自動車で移動すること、七時間。

景色は高層ビル群から高速道路の車の群を経て現在は周りには木しかない状況である。

夏は山深い場所に人が住んでると思うことがどうしても出来ないでいる。

「ナビの順路を辿ってるんで大丈夫だと思います……多分。」

煜は小さな画面と大きなフロントガラスの向こうを交互に眺めながらハンドルを切る。

これまでの旅路でカーナビを頼りに夏、清史、善、煜が代わる代わるハンドルを握ってきた。

「取り敢えず、さっきの復習をする。…山田一郎は？」

潜伏先である神永村の住人達に対しては正体が暴露で復讐計画に支障をきたす可能性を考えて偽名を使うことにしてある。

「俺、だね。」

善の呼び掛けに隣に座る清史はひらひらと手を振る。

「次、佐藤二郎。」

「俺だけど。てか、勝手に仕切らないでくれる？」

助手席から夏は文句を言いながらも答える。

「田中三郎は？」

「……………」

「おい、寝てんな！」

刀夜は背凭れと壁面に頭を預けて静かに寝息を立てていた。

起きろと隣に座る善が脇を小突く。

「お前は田中三郎だ。わかってんな。」

「…う………ん。」

かろうじて目を覚ましたのか返答らしき声が漏れる。

「次は、鈴木四郎。」

「俺ですよ。」

運転席から煜が返す。

「で、俺が斎藤五郎。…以上、計画の為にもお前らちゃんとやれよ。」

善が一通りの確認を終えた時だった。

『目的地に到着しました。ナビを終了します。』

突如道案内終了の知らせが鳴った。

「はあ?!まだ山の中なんだけど。」

夏が驚きと苛立ちを露わにする。

「故障か、何か？」

後部に座る善もどうかしたかと身を乗り出す。

「ここが神永村ってわけじゃなさそう…だね。まだ道も続いてるし。」

清史は前方を指差す。

確かにまだ道は続いているが今までと変わり映えのしない自動車一台がやっとの山道である。

「じゃあ、このまま道を進んで行きますか？」

「...まあ、それしかないんじゃない。」

夏は溜め息を吐く。

ここで立往生をしているわけにもいかない。

最初から進んで行く以外に選択肢は無いのだ。

「じゃあ、行きますね。」

煜は再びアクセルを踏み、五人の脱獄者達を乗せた自動車は山道を走り出した。

「あれ、開けてきた。」

ナビゲーションが終了してから更に山道をひた走ること三十分、ついに道の先に光が見えた。

「やっと着いたってこと？てか、遠過ぎ。」

完全に山道を抜けた解放から車を止めて熟睡している刀夜以外は思わず外に出る。

「へえ...ここが神永村ねえ。なかなかいいところみたいだね。」

長い長い道の先には、雄大な山々をバックに一面の田畑からなる緑世界にビニールハウスと古き良き日本家屋が点在していた。

「農業体験、ハイキングツアー、色々出来そうだな...。て、感動してる場合か！高瀬を探さないといけないのに人っ子一人いないってまずいだろ。」

辿り着いた達成感に浸る中で善ははたと気付く。

高瀬という人物はどんな外見で何処にいるのかを聞かされていない。

神永村について何も知らない。

なのに見渡す限りに人がいない。

これでは、あと一步で到着しないではないか。

「た、確かに。じゃあこの先に行って村人探しますか？」

笑顔から一転、煜の表情が曇る。

「それ以外なくない？」

はあと夏もまたむすっとした表情になる。

皆がぐるりと回り車内に戻ろうとした時だった。

「ねえ...なんかこっちに来てる。自動車...かな？」

清史が足を止めて村の方を見つめている。

「本当だ。もしかした迎えに来てくれたとか...ですかね。」

煜も振り返る。

微かにこちらに向かってくるものが見える。

段々と大きくなってくる。

「ちょっと、そんなの見えないんだけど？」

夏は目を細めて向こうを睨む。

「お前の場合は、目が悪いだけ。普段からPCしか見てないからそうなるんだろ。」

「ちょっと、何ディスってんの！」

夏は善に掴みかかる。

「離せ。そんな金にならない喧嘩を買うつもりはない。」

「はああ！ぶん殴らないと気が済まない！」

善の冷静さは夏に火に油だった。

「ああもう、何してんすか！水蓮さんも何とかして下さい！」

慌てて煜が仲裁に入る。

「ええ...せっかく面白くなって来たのに？」

清史はふふふと笑ってるばかりだ。

そうこうしてる間にもこちらに一台の自動車が近付いて来きて遂に到着した。

ドアから細身で黒縁眼鏡をかけた男性が出て来た。

「えっと...田中さん達ですか？」

四人の手が止まり、視線が集中する。

「そうだけど。もしかして...あんたが高瀬さん？」

焔はまさかと思い尋ねる。

「あ、はい！高瀬^{たかせゆの}優乃です。」

にこにこと優しい微笑みを浮かべる。

「...あれ、もう一人の方は？」

優乃は五人と聞いていたのに四人しか姿が見えない事に疑問を持つ。

「ああ...本当だ。つ...田中君はまだ車の中で寝てるじゃないかな？」

清史は危うく本名をいいそうになる。

「まったく...。じゃあ俺呼んできます。」

はあと溜め息を吐いて焔は刀夜を起こしに行く。

「ちょっと、なに本当の名前言いそうになってんの！」

ひそひそと夏が耳元で囁いて来る。

「以外と難しいんだよ...？いつもの癖っていうか慣習っていうの...けっこう怖いね。」

清史も優乃に聞こえないように声を小さくして返す。

「あの...何かありました？」

優乃は夏と清史の耳打ちが気になっているようだ。

「いや、大丈夫だ。問題ない。」

善は何もないとすぐさま返事を返す。

「すいません、遅くなりました。」

「...まだ、寝たい。」

目を擦る刀夜を何とか焔が引っ張って来た。

「じゃあ、全員揃ったし...自己紹介でもしない？」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

「俺は、山田一郎...よろしくね。」

「佐藤二郎だから。」

清史と夏は何ともなく名前を偽る事が出来た。

が、しかし次の刀夜はまだ眠そうにして何も言わない。

「次はお前の番だよ。」

見かねて焔がそっと耳打ちする。

「.....ん？.....俺は、月城と」

まだ目が覚めていないのか、車内での打ち合わせを聞いていないのか、刀夜は自分の名前を言おうとした。

そこをすかさず焔が口を塞ぐ。

「...月城？」

どうやら一步遅かったようだ。

優乃は目を瞬かせる。

「刀夜！自分の名前は言っちゃ駄目って言ったろ！」

煜の注意で完全に偽名である事が優乃に知られてしまった。

「星科君もそのツッコミ...完全アウトだよ？」

ははっと清史は腹を抱えて笑ってしまった。

「ああ！ごめんなさい！」

煜はしまったという顔をする。

「とうや？...偽名を使うなんて、あなた達は一体何者なんですか？」

優乃は震えた声で尋ねる。

「ああ、もう穩便に済まそうと思って計画したのに早速台無しにしないでくれる！」

夏は計画通りにならない事に苛つき声を荒げる。

「駄目になっちまったんだ、仕方ねえだろ。」

善はナイフをポケットから取り出し、優乃の喉仏に切っ先を向ける。

「高瀬ちゃんの疑問に答えてあげるね。俺たちは、脱獄してきた服役中の犯罪者。一言で言うなら...脱獄犯だよ。」

この出会いが後々に優乃と脱獄囚達の運命を大きく左右することになるのだった。

「やっと縦川まできたか。」

夏、刀夜、清史、善、煜の五人は東京から自動車に乗り長野県にある神永村を目指す途中である。

現在はサービスエリアの一角で休憩を挟んでいた。

「そろそろお腹空いたし...なんか食べない？」

まだ昼というには早い時間だが日の出から活動している彼らには丁度良いランチタイムだ。

「なんか買ってきてくれない？」

夏はちらりと刀夜と煜を見る。

「...なんで俺たちの方見るんすか。」

煜は視線に不満を抱く。

「こういうのは年下がやるものでしょ？ていうか俺が命令してるんだから...行く以外選択肢ないでしょ。」

夏はさも当然に言った。

「そんなの横暴過ぎるって！」

刀夜と煜は夏、清史、善に比べて年下である。

だからといって不当な扱いをされる謂れはない。

「年下っていうのは納得だけど...日田君の命令っていうのが、なんかね...。」

清史はやれやれと肩を竦めているが完全に顔が笑っている。

「はぁ！俺の命令が聞けないわけ！...おまえら全員ここで殺す！」

夏が勢い良く立った為ガターンと盛大に椅子が後ろに倒れる。

「...煩い、俺の睡眠を邪魔しないで。」

机の上で腕を枕にして眠っていた刀夜が起きてしまった。

すくっと立って、何処からか取り出したナイフを夏に突き刺そうとした時だった。

「待て！ここで騒ぎを起こすな！」

見かねた善がぴしゃりと一括する。

「日田はいちいち偉そうな言い方をするな。水蓮は日田を揶揄わない。月城はここで騒ぎを起こすことが後々の睡眠を妨げる事を考えろ。」

「ふんっ...。」

「ごめんね〜。」

「...確かに。」

善は、ばばばっと騒ぎを収める。

「後、昼飯係はじゃんけんで負けたやつってことで文句ないだろ？」

元々は昼を買いに行く事で揉めていたのでこちらも解決しておく。

「これで負けたら俺も文句ないっす。」

煜は納得いったようだ。

「はあ？じゃんけんって、そんな子供騙しで決めるわけ？」

夏は不満なようだ。

「いいんじゃない？...ふふ、もしかして日田君...負けるの怖いの？」

清史はまたも夏を揶揄う。

「そんなんじゃないし！そんなにいって、俺に負けた後で後悔したって遅いから。」

夏は見事に挑発に乗る。

「じゃあ、最初はグーで始める...って月城は寝ようとするな。」

善が机に突っ伏す刀夜の体を揺する。

「...うう.....じゃんけん...すればいいの？」

眠りを妨げられ不機嫌そうな顔をする。

「じゃあ、いくぞ。最初はグー...じゃんけんぽん！」

善の掛け声で一斉にテーブルの上に手を出す。

「...勝った。寝ていい？」

刀夜がグーで他四人はチョキを出した。

「寝るって...これからお昼なのに寝ちゃうの？」

清史は刀夜に待ったをかける。

「...確かに。」

刀夜は傾きかけた体を起こす。

「じゃあ、次いくぞ。最初はグー...じゃんけんぽん！」

刀夜を除いた四人の手がテーブルに出される。

「よっしゃ！じゃんけんになってよかった！」

「まあ、言い出しっぺが負けるのもあれだからな。」

煜と善がパーで勝つ。

「ふふ...残っちゃった。.....不満そうだね...日田君。」

最後の二人に残ったのに清史は余裕な笑みを浮かべる。

「煩い！お前には絶対負けないから！」

一方で清史の余裕が夏の表情を一層陰しくさせる。

「じゃあ、最後だね。最初はグー...じゃんけんぽん。」

清史と夏の手がテーブルに出される。

「うん、まあ当然ってところ...かな？」

清史がパーで夏がグーを出した。

「なっ...こんなのありえない！どんなインチキ使ったわけ！」

夏は現実を受け入れがたいのかわなわなと震えている。

「日田君、わかりやすいからね～。負けが続いてたし、頭に血が上ってたから考えが丸わかりだったんだよね。」

清史はにこにこ勝因を語る。

「...肉食べたい。」

夏に視線を向けて刀夜は一言注文する。

「なら、あそこにあるローストビーフ丼なんてどうだ。」

煜は向こうを指差す。

「うん、じゃあそれにする。」

「俺もそれをお願いします。」

刀夜と煜は浮き浮きした表情を浮かべる。

「俺は...向こうで盛り蕎麦を頼む。」

善も注文する。

「うーん...じゃあ、あっちにあるハンバーガー食べたいかな。」

どうしようかと視線を彷徨わせて、清史も夏に頼む。

「本当、後で覚えとけよ！」

全員の希望を聞いて夏は仕方なく買いに行こうとする。

「あ、待って！まだ注文終わってないよ？後、あそこで適当に日田君のセンスで地サイダー1本とデザートは...あそこにプリンがあるね...それもよろしく♡」

清史は追加で買い物リストを増やす。

「俺たちもプリンお願いしてもいいですか？」

「日田のセンスか...面白そうだな。俺もサイダー頼む。」

煜と善も清史に触発されて更に注文する。

「ざけんな！そんなに買ってこれないっての！」

ぶちっと堪忍袋の緒が切れる。

「出来る出来ないじゃなくて、負けたの日田君なんだからやってもらわなきゃ...だよ？」

切れる緒などもう存在しない夏を更に揶揄う。

「許せない！絶対後で殺す！」

不満で不満で仕方がないが、夏は昼ご飯を買いに行った。

「なんだかんだで律儀だよね、日田君って。」

清史は夏の背を眺めながら微笑む。

「確かに、日田は偉そうにしているがやる事はしっかりやる奴だな。」

善も清史と同意見だ。

「パソコンでは誰も勝てない凄い人ですよ。」

「体力ないし、煩いけど。」

煜と刀夜も思っている事は同じだ。

「それはそうと...水蓮、あんまり日田にちょっかいかけ過ぎないようにしろよ。」

大体、清史が笑っている時は悪戯を考えている時だ。

「ええ...俺から楽しみ奪わなくれない...かな？折角、日田君とじゃんけんするっていう遊びを思い付いたのに。」

やはり善の予想は当たった。

今後も夏にじゃんけん勝負を挑んで負かして揶揄うつもりのようだ。

「...お前、わざと日田との勝負になるようにやってたのか？」

勝負中の余裕の笑みが頭を過る。

「まさか...偶然だよ？月城君と金野君は表情読み辛いし...ね。」

清史は、どちらとも取れない曖昧な回答を寄越す。

今後、この一件から起こる事で夏が清史とのじゃんけんにトラウマを持つ事になるとは誰も予想だにしていなかった。

後書き

ここまで読んで頂きありがとうございます。
いかがでしょうか、PrisonBreakersは？
個性的な囚人達のやりとりをお楽しみいただけたかと思います。

一話では七欲はまだ清史と夏以外は明かされていないです。
まだまだ名前だけ登場の囚人達もいます。
神永村もまだまだ入り口付近しか描かれていません。
次からもどんどん明かされていく事実と増えて行くキャラクター達との掛け合いでもっと賑やかになっていくので楽しみしてして下さい！

次の話Plan-2以降は、出来上がるのがいつになるかはわかりませんが...気長にお待ちいただけると助かります。
本当に読むのお疲れ様でした。

PrisonBreakers Plan-1

<http://p.booklog.jp/book/113079>

著者 : 163

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/himegoto163/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113079>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト